



宮川寅雄墨書「南原繁歌集讚」四首（松本文庫蔵）

《研究ノート》

歌人・南原繁論のための若干の資料ノート

— 宮川寅雄 「南原繁歌集讚」四首ほか —

松本昭雄

はじめに

わが居室には、先師宮川寅雄先生の「南原繁歌集讚」と題された直筆墨書の短歌四首が秋艸道人會津八一の「学規」四則とともに壁間に掲額されてある。

それらは、もうここ二十年余ものあいだそろってそこに在って、私に対して、「ときには、静かに机前に端虚思間すること」を求めていたが如くである。

南原繁は、香川県に生れ、政治哲学を探究するとともに、敗戦直後東大総長をつとめ、一方歌人としても戦時下十年の短歌作品

をまとめて、歌集『形相』（一九四八年刊）を世に問うた。

その高い思想性は、短歌界においても独自の地位を占め、現在までも読みつがれるところとなっている。

南原繁は、この『形相』一卷をもって生涯の歌集としたいとい、自己の多くの学問的著作よりものちのちの世に長く残るものだとした。

さらに、「喘ぎ求めて来た世界観や国家観、乃至は人生観を、私その他の学術論著におけるよりも、より端的に、直接的に、謂わば純粹生地の相において汲んで頂けるかと思う」と位置づけたことは、つとに知られるところとなった。

しかし、一般やいわゆる歌人の世界における関心は生地など極く狭い地域を除いて、決して高いとはいえない。

南原繁の歌は、その内容の歴史性においても、平和・国家・憲法をめぐる真剣な論議が必要な現在にとっても、深く示唆するところ甚だ多いと云わねばならない。

さて、南原繁は、郷土が生んだ偉人の世界的人物として空海と平賀源内を挙げていた。

一九八〇年空海記念碑の建立が、中国西安市に計画され、中国への働きかけ等の指導を、当時日本中国文化交流協会理事長をされていた宮川寅雄先生にお願いした折、南原繁が同郷の人であり、

歌人でもあったことをお話ししたことがあった。

南原繁については、先生はとくに知っておられたであろうが、自己の歌集『風琴』編集の最終段階において、ふとさきの筆者とのなしを思いだされあらためて文庫本として発売直後の『形相』を求められたのかも知れない。それはともかく読後直ちに「茂吉評はよい。よい歌あり。南原さんを見直すというより、さもありしと思う。」と日記に誌された。

宮川寅雄先生のことについては、先生をよく知る針生一郎氏に「宮川寅雄論序説」がある。

論中、宮川先生の前半生と後半生にある大きな断層についてふれ、「前半生の政治的活動と会社員生活のあいだ、その旺盛な好奇心と芸術的表現意欲は、あくまで個人的趣味として潜在するほかなかつたし、後半生の文筆家・学者への転身も、もちまへの感覚の柔軟さで難なくきりぬけたものの、ついに明確で遠大な自己の主題を形成するにはいたらなかった。」そして、「最初の歌集出版計画が、宮川さんに生涯のしめくりの自覚をかきたて」残された時間を「自己に沈潜しようという決意」ともみえるとした。

まさに、宮川寅雄先生は師八一に発し、茂吉に通った歌作において、すでに独自の風を確立されたが、歌集をまとめようとする段階において、南原繁の歌に邂逅し、激動のなかかたつぶりの殻

にひそみしが如く「洞窟の哲人」として研究室の沈潜の日々から『形相』を得た南原繁の十年と、自己の「旺盛な好奇心と芸術的表現意欲を潜在させるほかなかった」前半生の十年を重ねあわせて思い、「さもありしか」、「さもありがたい」と、たましい移すが如き深い感慨をもつて、全き賛意の四首を感得したのではないか。そして、手離しとも思える歌人・南原繁への頌歌を、自己のこれまでの全歌業に匹敵する重さをもつて『風琴』の人々詠のなかに、「茂吉を憶う歌」とともに据え込んだのではないか。

やがて、この四首は、宮川先生かねて豊富の北京榮齋齋制信箋二枚に、無碍無衝、墨つぎもどかしいほどの勢いを駆つて筆を染め、手紙文抜きに「どうだ」とばかり四国へ向けて郵投されたのである。

芸術的分野についてとはいえ、目ざす南原繁先生はあまりにも高き峰。登らんとして絶るは大先達宮川寅雄先生。いずれもいづれを照応していかにも厳しく、重い。

例 言

一 収載の資料類は、南原繁自身の著作とその見解、関連する歌評、書簡、日記、新聞切抜記事、歌曲集など幅広くとりあげた。

一 本稿は南原繁のすぐれた歌人としての業績を講義あるいは紹介するに際して、便宜とする目的において既発表のもの及び松本文庫所蔵等の未発表の資料を用意したものであるが、また論考をまとめる準備のための第一段階の資料とするものでもある。

一 南原繁が歌集『形相』を世に問うた際、いちはやくこれを高く評価したのは、會津八一の『南京新唱』の場合と同じく斎藤茂吉であった。

そこで、『形相』発表当時の諸々の反響の中心として茂吉を位置づけた。

一 また、本資料ノートの根幹をなす宮川寅雄先生とその師會津八一については、幸いに新潟市立會津八一記念館ならびに宮川木末氏のご好意により未発表資料も収載することができた。

一 もとよりこれまで発表された多くの資料からの選択と、その内容の取捨抜粹などについては、全く筆者の観想に基づくものであり、あたかもそれは南原繁と斎藤茂吉と會津八一・宮川寅雄師弟の、短歌を縁とするトライアングル関係が響韻する詩境を現出せんと意図されたかの如くであることをおことわりしておきたい。

目次

はじめに	ページ	1
例言	3	
資料		
一 基本資料としての歌集『形相』等における著者南原繁の見解等	6	
1 創元社刊（一九四八年、昭和三年三月一五日）歌集『形相』あとがき（抜粋）	6	
2 東京大学出版会刊（一九五八年、昭和三三年七月一日）『ふるさと』あとがき（抜粋）	7	
3 図書月販復刊（一九六八年、昭和四三年六月一〇日）歌集『形相』まえがき（抜粋）	7	
4 南原繁書簡（安田章生宛）(1)(2)	8	
5 田辺元書簡（南原繁宛）	9	
二 歌集『形相』をめぐる南原繁と斎藤茂吉の接点	9	
1 斎藤茂吉日記（抜粋）(1)(2)(3)	9	
2 斎藤茂吉「日本読書新聞」（昭和三年五月二二日号）掲載『形相』評（抜粋）	10	
3 斎藤茂吉書簡（南原繁宛）(1)(2)(3)	11	
4 南原繁「短歌研究」（一九六六年二月号）所載「邂逅」（抜粋）	12	
三 歌集『形相』刊行の契機となった佐々光典の役割について	13	
1 南原繁書簡（佐々光典宛）（抜粋）(1)(2)(3)(4)	13	
2 松本文庫蔵（未発表）南原繁書簡（佐々光典宛）(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8)(9)	13	
3 松本文庫蔵南原繁贈呈本（佐々光典宛）8点9冊	15	
四 會津八一（宮川寅雄の師）と南原繁の接点	16	
1 松本文庫蔵會津八一墨書贈呈本（南原繁宛）	16	
2 新潟市會津八一記念館蔵（未発表）南原繁書簡（會津八一宛）	16	
3 津田事件における會津八一の関与	17	
(1) 第一審にあたって裁判長宛に提出した上申書（抜粋）	17	
(2) 津田左右吉博士のこと	18	
五 宮川寅雄と南原繁歌集『形相』	19	
1 松本文庫蔵宮川寅雄「南原繁歌集讀」四首	19	
2 松本文庫蔵宮川寅雄「南原繁の歌」二首	19	

	3	短歌新聞社刊(昭和六〇年二月二十五日) 宮川寅雄	
		歌集『風琴 宮川寅雄歌集』(抜粋)	20
	(1)	人々詠	20
	(2)	あとがき	20
	4	宮川寅雄日記(未発表) (1)(2)(3)	21
	5	宮川寅雄枕頭絶筆短歌一首	23
	6	針生一郎「宮川寅雄論序説」(抜粋)	23
	六	師會津八一と宮川寅雄	24
	1	會津八一添削宮川寅雄歌藁(未発表)	24
	2	會津八一書簡(宮川寅雄宛) (1)(2)(3)	26
七		歌集『形相』ならびに南原繁の短歌に対する評価の推移 の一端	27
1		図書月販『形相』復刊時(一九六八年、昭和四三年六 月一〇日)における報道・歌評等(1)(2)(3)	27
2		最近の関連新聞記事から(1)(2)	29
八		歌集『形相』の短歌八首の作曲をめぐって	29
1		平井康三郎歌曲集「春光」	29
2		南原繁書簡(米国在住四女中込悦子宛) (1)(2)(3)(4)(5)(6)	32

一 基本資料としての歌集「形相」等における著者南原

繁の見解等

1 創元社刊（一九四八年、昭和二十三年三月一五日）歌集「形

相」あとがき（抜粋）

一

本書は、昭和十一年より同二十年にわたる十年間、日誌代りに書きつけて来た短歌ノートの中から、八百十九首を自選編輯したものである。時代は恰も日華事変から欧羅巴大戦、ひいて太平洋戦争へと、世界有史以来の歴史の変乱と、またそれを反映して著者が職を奉ずる大学においても、未だ嘗てない受難の連続であった。その中に生き、国民とし、学徒として共に擔ひ来った苦悩は大きいものであった。加之、齢疾くに不惑を越えた筈の著者が、なほ一個の人間とし、求道者としてさまよひ傷ついた内的苦闘の跡は、自ら顧みて憐れなものがある。

本集は、かかる実存の状況のもとに、人知れず戦ひ来った著者が生の記録であり、魂の告白である。それがいかに苦悩と暗黒に覆はれておようと、それを通して一筋の道を求めての努力精進であった。それはまたこの十年間、世界人類の——そしてわが民族も、識らずして同じく辿り来った運命でもあるのである。それは實在の単なる仮象ではなく、アリストテレス謂ふところの、永

遠的なるものの「形相」（エイドス）としての生の現実態に外ならぬ。本書の題名はそれに因んで附けたのであり、随って「けいさう」と読んで頂きたい。

その中には、こういう歌も詠まれてある。

いのち死すといふはやすし現身は生きつつをりて昼も夜も苦しむ

かぎろひの一日むなしくわがありて魂冴ゆる夕べひととき

善悪の彼岸に政治はありといふ現代にあてはめてしかも然る

か

（以下二首畧）

総じて本書をいいて、読者は、著者の喘ぎ求めて来た世界観や国家観、乃至は人生観を、私の他の学術論著におけるよりも、より端的に、直接的に、謂はば純粹生地じやうじの相において汲んで頂けるかと思ふ。

二

さりながら、凡そ詩歌は一つ一つがまたそれ自身芸術的作品でなければならず、かようなものとして決して単なる趣味や風流事ではなく、厳しい修練を要する労作であり、またそれが奮たに短歌の作法や技術テクニク以上に、先進謂うところの「全力的」に凝集されねばならぬ全人の業であることも、中々到り得ぬ境地ではあるが、

自分にも了解できる。(中暑)

併し、そこに詠み出された詩精神と内容は、いかに幽かであろうとも、自分ながらのものである。私の専門の論作においてと同じく、人間性理想と自由の精神は作歌の場合でも私の生命であり、かかる欲求から飽くまで自己自身を突きつめると共に、戦前戦時を通じて時代を嘆き歌って来たことは、聊か本書の特色かと思う。(中暑)

優れた歌人の歌一首がよく一巻の哲学書や一篇の小説にも勝る深い感動を以て人に迫ることあるは、私の屢々経験したところである。真に後世に伝うるに足る歌幾首を遺し得れば、人間生涯の意義あることも、私に首肯できる。これよりわが国の歌壇が新しく復興し、そうした真摯な歌人の輩出せんことを、私は念じて已まない。

三

著者自身はもとより一介の学徒として、歌はまことに業余のすさびであり、且つ最初に記した如く、本集は短歌の形式を以てする時代の歴史的背景と、そこに生き来つたひとりの人間の実存の記録たらんことを意図したために、精選主義には拠らず、比較的多くを収録した。(中暑)

最後に、私をしてこの秋敢て歌集出版を決意せしめる機縁をつ

くつた法学士佐々光典君の真実(中暑)に対し、心からなる感謝をささげる。(後暑)

2 東京大学出版会刊(一九五八年、昭和三十三年七月一五日)

『ふるさと』あとがき(抜粋)

本書の主篇『ふるさと』(他に小篇「母」も収録)筆者注)には短歌を二百五十七首挿入してあるが、数首を除き、すべて郷里において病臥中の作である。私はかつて私の業餘のすさびである歌集「形相」(昭和二十三年創元社初版発行)の後記において「:著者の裡なる微かな光がもつと大きくなって、ほのほのとし明るい歌集が他日編まれる日の到来を願っている」と書いたが、それから十年、私の内外の情況は歌をつくる気分になれず、断念していたのである。この点において、この書はたまたま前の約束を何ほどか果たしたことになるかも知れない。ただ、こんどの特殊の事情からも、相変わらず明るい歌が少ない。同時に、故郷滞在の記録にもと考えて、なるべく数多くを収めたことから、内心忸怩たるものがあるが、そのうち幾首かでも鑑賞に堪え得るものがあればと念じている。(後暑)

3 図書月販復刊(一九六八年、昭和四三年六月一〇日)歌集

『形相』まえがき（抜粋）

本書は歌集「形相」（昭和二十三年三月初版発行）の復刊である。収めるところは、日本にとつても世界にとつても、かつてない動乱と戦争の時代―昭和十一年から同二十年にわたる十年間の作品である。「あとがき」にも詳しく記してあるように、この時代をひとりの学徒として、また人間として、生きた著者の偽りなき記録と告白である。（中畧）

『形相』の後、発表したもの、また未発表のものも若干あるけれども、この「形相」一巻をもつて生涯の歌集としたい。私は自分の専攻する学問もさることながら、それほどこの時代は短歌によつて生きていたと言つていい。

当時は、民主主義の今の時代においては想像もできないほど、戦争はもとより、時の政治について、批判は全く抑圧されていた。それは詩歌の形式をもつてする場合でも相違はなかった。かような時代に、自分の思想や感情を、ありのままに歌つて、あるいは憤り、あるいは自らを慰めていたこれらの短歌は、顧みて微かながら時代を憂い、嘆いた市民の声であつたかも知れない。

同時に、一個の凡夫として人知れず内に迷いと苦惱——自己自身との闘いがなかつたわけではない。その間、著者を救つてくれたものは、美しい自然と永遠なるものへの思慕であつた。

終戦直後、本書が出版された当時、広く江湖に読まれたと同じく、戦後二十余年の今日、事変や戦争を知らぬ特に若い人たちが、また時代は違つてもその中を自分に真実に生きようとする方たちを読んで頂きたい。（後畧）

4 南原繁書簡（安田章生宛）

岩波書店刊（一九八七年一月三〇日）『南原繁書簡集』より
（1）一九四八（昭和二三）年七月二十一日 奈良市法蓮北町

安田章生宛 封書（抜粋）

（前畧）

拙き歌集に対し、かくまで御愛情と御共感を賜はり、御厚志身にしてみても忝く存じ上げます。それは年齢や職業の相違を超え、詩と真実が結んで呉れた友情として永く記憶されるであります。（中畧）小生も爾来多忙、歌も詠み得ぬ環境に在りますが、せめて諸賢の作品や歌論を拝見するのを楽しみに致します。（後畧）

（2）一九四八（昭和二三）年十二月三十日 奈良市法蓮北町一

三一四 安田章生宛 封書（抜粋）

（前畧）

短歌研究誌上の御時評も拝見しました。

戦後別の意味で歌壇再び活況を呈せる如きも、そこには依然「永遠の詩」の乏しいことを寂しく感じます。これは結局貴君の云はれる「高い詩精神」の欠如に在ることでしょう。(後畧)

5 田辺元書簡(南原繁宛) 一九四八(昭和二三)年四月二

十一日 北軽井沢より 封書(抜粋)

(前畧)

御惠贈の御歌集、形相、忝く拝受仕り(中畧) 世界と国家との動乱の時期に於て、動きなき御信仰と堅き御節操とを御守り抜きあそばされました御高風の半面にひそむ、憂国の御至情に貫かる、学問御研究の御苦心、思想の自由のためにせらる、御苦闘の御跡を偲び、唯々敬仰の念に充たされました。なほその間に点綴せられました御生活経験の深く細やかなる御感情、わけても御肉親御師友との御別離の御悲歎など、しみじみ心に徹する思を致しました。まことに理性と感情との両面にわたる唯一無二なる御体験の結晶、真に形相の御名に背かざることと讃嘆申上げる次第でございます。小生には仰慕しつゝ、しかも達する能はざる理想を御示し下さいましたものとして、御高作に今後戒められ励まざる、ことを期する外ございませぬ。(後畧)

二 歌集「形相」をめぐる南原繁と齋藤茂吉の接点

(齋藤茂吉日記、同南原繁宛書簡、同「形相」評等により、その発端から時系をおつてたどる)

暑き幾日(いくにち)齋藤茂吉の歌をさがしに

上野図書館に通ひ来りき

南原繁(昭和一年)

岩波書店刊(昭和五〇年五月二三日)「齋藤茂吉全集第三十二

卷」より

1 齋藤茂吉日記(抜粋)

(1)一九四八(昭和二三)年四月一日 木曜、ハレ、面会日

○唐木(日本読書新聞)南原氏ノ形象持参

(以下畧)

(2)一九四八(昭和二三)年四月二十三日 金曜、ハレ、クモ

リ、遠雷、強風、雷雨(住友信托地下金庫)

(中畧)

○「形相」ノブックレビュー五枚

(以下畧)

(3)一九四八(昭和二三)年六月九日 水曜、ハレ、暖(汗ナ

ガレル)

○土屋、南原、アララギ支社(轉載禁)

(以下畧)

2 斎藤茂吉「日本讀書新聞」昭和二三年五月二二日号掲載

『形相』評(抜粋)

「こころふかく沈潜すれば

歌はおのづから思想的となる

歌人 斎藤 茂吉

『形相』は、東大総長南原繁氏の新歌集であつて、集名は「アリストテレス謂ふところの永遠的なるもの形相(エイドス)としての生の現実態に外ならぬ」に基づいて居り、その同容もほほこの集の名が暗示して居る。

内容はなかなか広範囲であつて、単なる花鳥風月でもなければ、単なるイデオロギーの縮写でもない。作者の生の切実なる表現として読者のまへにあらはれたのである。南原氏は、専門の学者で、大学教授で、現在東大総長であるが、かういふ境界の人が、短歌のやうな小文字を軽蔑せず、沈潜し、つつましく生表現の抛りど

ころとせられる、といふそのことが既に自分の如き老歌人にはふかい親しみを感じるのである。(中畧)

戦の果はさもあらばあれ秋の日の野の上に赤く昏れ入りにけり
戦の興奮のなかにこの夏を送り来りてわれおほおほし

かたぶく月にむかひて思へらく世はゆくところにくくにかあら

む

わが頭あたまのなかにとどこほれるものあるらしきこの夜もまた睡
られざらむ

ぬば玉のま夜をひそかに遮光してわれは虚しき理論を考ふ

大戦のなかにあつて、国民は等しく興奮し等しく励み等しく苦しんだ。如上の歌の詠歎は、皆真率なる国民のこゑであつたのである。たたかひ止んで、国民はほつとした。或は呆けしごとくなつた。けれども、沈痛なる此等の詠歎を忘却しがたいのである。

いのち死すといふはたやすし現身うつしよは生きつつをりて昼も夜も苦しむ

さもあらばあれわれ神を信じつつありのままなるいのちを遂げむ

谷ほちふかき洞ほちなかに火の燃ゆる見ゆさながらわれの生きて来にけり

(中畧)

心ふかく沈潜すれば、歌はおのづから思想的となる、即ち、思想的抒情詩である。この作者の本態が既に思想的であるから、その結果として是等の歌の出来るのは、自然的とも請へるのであるが、やはり「形相」一巻のなかの特殊相として尊敬すべきである。そして貫くものはヒューマニズムであり、基督教的信念である。

(中畧)

昭和二十年の「某日某夜」「劫火」「焦土」等が、手堅い写生で棄難いものだから、読者は軽々に看過してはならぬだらう。(中畧) この集に、「童貞をたまちしわれの若き日を恋ひおもひつつ老をたのしむ」の一首がある。この独語的詠歎、「人間」的詠歎に至って、短歌独自の権利を感得することが出来る。何といふ楽しいことであらうか。

3 斎藤茂吉書簡(南原繁宛)

(1) 一九四八(昭和二三)年六月九日 新宿区下落合二ノ七〇

二 南原繁先生侍史 代田自宅より

拝啓御多忙中御懇書たまはりました感謝いたします又拙文に対して御言葉頂戴恐縮に存じ奉りました一度御大学にも参上拜眉樂しみにいたして居りますがなかなか中央街に出ること億劫にて失礼いたし居ります御多忙中御作歌願ひ上げます廣野三郎君を通じま

して時折申上げます、頓首 〇〇〇 斎藤茂吉拜 南原総長玉案 下

近々のラヂオにて御声はじめて拝聴、大によろこびました

(2) 斎藤茂吉から南原繁あて書簡(名刺)

一九四八(昭和二三)年四月一日(推定) 南原先生(名刺)

御高吟「形相」何とも忝く拝受いたしました、取あへず御礼迄

斎藤茂吉敬白 南原先生

(3) (古書目録抽選もれのため入手できずまぼろしに終った南

原繁から斎藤茂吉あて書簡)

一九四八(昭和二三)年

「二一七八 南原繁書簡 斎藤茂吉宛

ペン15行 封筒付 昭23 一通」

二〇〇五(平成一七)年九月二日・三日

於東京古書会館地下一階

書窓会古書即売目録「まど展」

風月堂書店出品

右の古書展抽選はずれのためその存在を知るのみで内容を知るに至っていないが、月日を推定すると、

〇推定(4)四月二十三日の日記記事に「〇『形相』／ブックレ ビュー五枚」とあり、事前に南原に原稿を送付し、その礼状で

ある可能性がある。従って四月二十三日以降五月十二日（読書新聞掲載）までの間に発せられたもの。

○推定（五月十二日の読書新聞掲載を読んでから発した礼状である可能性。従って五月十二日以降六月九日（茂吉から南原あて折返し礼状）までの間に発せられたもの。

4 「短歌研究」（一九六六年二月号）所載「邂逅」（抜粋）

邂逅^①

南原 繁

私は斎藤茂吉先生に生前ついにお目にかかったことがない。それでも、私は近代歌人のうちで茂吉の歌を最も尊敬し、それと取り組んだといつては大仰であるが最も勉強したものである。私は歌はいわば業余のすざびに過ぎず、且つ晩学であつて、いずれの歌壇にも属したことがないが、近代では子規から始めて、左千夫・赤彦・茂吉という順序に遍歴した。なかならず茂吉を愛読し、いまだ全集のなかつた頃で、その古い歌をさがしに上野図書館へ通つたこともある。短歌一首がよく一巻の哲学書や長編の小説にも匹敵する無限の意味を内包しうるものであることを知つたのは、茂吉の歌からである。（中略）

なぜ、それほど私が茂吉の歌を愛好し、尊重するのか。彼は医

学者として自然科学はもとよりであるが、わが国のはじめ、ドイツの哲学・文学・芸術等、あれだけ広く、深い背景をもつた歌人は、他に比類をみないのではないか。そこには蔵王山麓から生まれ出た純日本的のものが普遍的人間的なものによって裏づけられていたと思われる。だから、戦後、時代が急変しても、直ちにその精神を把握し揚言しえたのではあるまいか。その一つに

万軍はこの日本より消滅す^{きよ}浄く明^{あか}しと云はざらめやも

（昭和二十一年作）

いかなる政治論も憲法学説も、これほど鮮やかに新憲法の精神と日本の在り方を宣明したものは、おそらくないであろう。戦後、私のささやかな歌集が世に出たとき「心ふかく沈潜すれば歌はおのづから思想的となる」として、某紙上^②、過分の推奨を頂いたことがある。私は歌を通して茂吉を知り、私の生涯に茂吉先生に邂逅したことを、有りがたい幸福と思っている。

注

（1）岩波書店昭和四八年八月一八日刊『南原繁著作集』第十巻収載では原題「邂逅」を「茂吉考」としている。

（2）『日本読書新聞』昭和二十三年五月二二日号のことである。

三 歌集『形相』刊行の契機となった佐々光典の役割に

ついて

1 南原繁書簡(佐々光典宛)(抜粋)

岩波書店刊(一九八七年一月三〇日)『南原繁書簡集』より

(1)一九四七(昭和二二)年六月七日 大阪市天王寺区悲田院

町三 佐々光典宛 封書(抜粋)

(前畧)

就いては、お勧めのうち「論文集」は若干手を入れねばならず、又未だ書き足さねばならぬものもあり、今のところ到底その暇なく、「歌集」ならばこの一―二ヶ月の間には纏めることが出来ませう。丁度終戦に至る十年位の期間、小生には人間としても学徒としても内的苦闘の時代であり、日本も世界も苦悩動乱の時代であり、書名は「乱雲」(未定)とでも題して出したらば、多少特色あるものになりはしないかと考へ、取り掛って見てをります。四六版で成るべ三百頁前後に纏め度いと思ひます。印税などは可然、只少しでも安く読者の便を図ることにし、校正の方は貴君が居られるのでこんな幸なことはありません。(後畧)

(2)一九四七(昭和二二)年八月十日 大阪市天王寺区悲田院

町三 佐々光典宛 葉書(速達)

(抜粋)

先般中は用紙のことでいろいろ御配慮忝く存じます。御返事遅れましたが、いよゝ原稿完了、出版所も創元社と決定致しましたに就いては、御指図に従ひ本日、城新太郎氏へ書面を以て同社員紹介かたゝ御挨拶致し置きました。(後畧)

(3)一九四七(昭和二二)年九月二十六日 大阪市天王寺区悲

田院町三 佐々光典宛 封書(抜粋)

(前畧)

御配慮の件は漸く適當の品がありそうで、目下型、価格などを問合せ中との創元社の話です。首尾よく整へればと願ひ居ります。いろいろ御骨折有難く存じます。若し成立致しますれば、上梓の際、御関係者には小生よりも御挨拶致すつもりです。印刷には取りかかつてをります。(後畧)

(4)一九四九(昭和二四)年八月十二日 大阪市天王寺区悲田

院町三 佐々光典宛 葉書(抜粋)

(前畧)

非学問的な本を出しましたが、皆が読んでゐて呉れるので、これも何かの御役に立つことでしょう。(後畧)

2 松本文庫蔵(未発表) 南原繁書簡(佐々光典宛)

(1)一九四八(昭和二三)年五月五日 大阪市天王寺区悲田院

町三 佐々光典宛 東京大学より 葉書(速達) ペン書

前畧 来る五月九日夕着にて上洛(俵屋止宿)十、十一日京都にて会合あり、十二日下阪、昼前後日銀にて財界有力者諸氏と会同、午後二時大丸に於て元住友重役北沢啓次郎君肝入にて同窓生諸君の会合ある筈。若し御都合叶ひ大丸に於て御目にかゝり得れば幸甚。小生の外に我妻法学部長華山^を、岡田理学部長も同行。若い同窓生諸君の御参加御希望あれば北沢君と連絡御取り下され度し、同夜は御影にて宿泊、翌日帰京の予定。先は御報らせまで

(2)一九六二(昭和三七)年四月二三日 世田谷区深沢町三丁

目二〇 佐々光典宛 新宿区下落合二の七〇二 南原内

葉書 ペン書

仰せの通りよい時節になりました此度は御家族様も御上京楽しい御団樂の時を持たれましたよしそして一番御心配遊ばされておましたお嬢様の御転校もおきまりになり何よりと御同慶に堪へません先日わざわざこんな遠くまで御運び頂きましたのに生憎留守致し主人共々ほんとに残念いたしました又大好物のお土産御高配恐縮いたしつゝ、拝受いたしました厚く御礼申し上げます奥様はじめ皆様にもどうぞおよろしく主人よりも正によりしく申し出ましたをくれながら御厚札まで

(3)一九六三(昭和三八)年九月一七日 世田谷区深沢町三ノ

可しこ

二〇 佐々光典宛 新宿、下落合二ノ七〇二 墨書

拝啓 過日はわざわざ御越し下されいろく有難う存じま須御指摘の近刊予告(図書)には誤字誤文有之原本には「小野塚喜平次——人と業績」と相成り居ります来月二十五日発売の筈であります先は不敢取御札まで 早く

(4)一九六四(昭和三九)年十二月二六日 世田谷区深沢町三

の二〇 佐々光典宛 新宿区下落合二の七〇二 南原内

葉書 ペン書

この年も愈々押しせまり、お寒さも一段と加わって参りましたが、お変わりなく御多忙のうちにお過しのことと存じます。この度は又、お心こもる何よりの御挨拶のお品をお送りいたゞき有難う御ございました。大好物にて大喜こび致しております。どうぞくれぐれも御自愛のほど。良い新年をお迎え遊ばされますようお祈り申し上げます。まずは御札まで。 かしこ

(5)一九六五(昭和四〇)年一月三〇日 世田谷区深沢町三一

二〇 佐々光典宛 東京都新宿区下落合二ノ七〇二 封書

(印刷)

(博子夫人死去の弔意に対する挨拶状)

(各方面への同文印刷、省畧)

(6)一九六五(昭和四〇)年一月一七日 世田谷区深沢町三

丁目二〇 佐々光典宛 新宿、中落合二丁目一七ノ一 葉書 ペン書

拝啓 お手紙有難く拝見しました 三谷全集は第四巻後半からは未刊のものを編纂。それも漸く終りあとは校正の事務丈と相成りまし多 いろくくと御支援忝く存じま須 いづれ御拝眉の上にて

早く

十一月十七日

(7) 一九六六(昭和四二)年八月六日 世田谷区深沢町三ノ二

書 ○ 佐々光典宛 新宿区中落合二一七一一 葉書 ペン

拝啓 いかッお過ごしかと御案じ申上げて居たところでした お障りなく何よりもことに存じ上げま須 又佳品御贈り下された由いつも乍ら御厚志有難く存じま須 いつか御序を以て御越し頂き度萬話拝聴を楽しみに致し居ります 酷暑の折柄皆様御大切のほどを念じ上げま須 御礼可たぐ

(8) 一九七一(昭和四六)年五月一九日 横浜市港北区篠原台

町三一六 白楽ハウス 三〇六号 佐々光典宛 東京、

新宿中落合二一七一一 封書 ペン書

拝復 お手紙有難く拝見致しまし多、お障りなく御働きの由およろこび申し上げま須、藤井全集御購入の由有難く存じます。又小

生の私家版まで御入手の趣、恐れ入りま須。御母上久しぶりの関

西下向の御様子、^(無ノ誤りカ)筈御満足のこと、存じ上げます。小生このとこ

ろ、特に今月は多忙に致し居りますが、その内御拝眉の折を得度、いろくく承り度く存じま須、先は御返事可たぐ 早く

五月十九日

南原 繁

佐々光典様

(9) 一九七四(昭和四九)年一月吉日(二二日) 横浜市港北

区篠原台町三の一六 白楽ハウス 三〇六 佐々光典宛
東京都新宿区中落合二の十七の一 葉書(印刷)

(入院治療のため年賀遅延の挨拶)

(各方面への同文印刷、省畧)

3 松本文庫蔵南原繁贈呈本(佐々光典宛) 8点9冊

① 国家と宗教増補版 昭和21・1・30第3刷 岩波書店

墨署 佐々光典君 南原繁

② 学問・教養・信仰 昭和21・3・30初版 近藤書店

墨署 佐々光典君 南原繁

③ 自由と国家の理念 昭和34・9・20初版 (株)青林書院

墨署 佐々光典君 南原繁

一九五九・一二・二二

(付書評切抜) 相沢久、毎日新聞

④南原繁先生古稀記念 政治思想における西欧と日本(上)

1961・1・30初版 (財)東京大学出版会

墨署 佐々光典学士 南原繁

一九六二年二月

(付書評切抜) 城塚登、五十嵐豊作

⑤同(下) 1961・11・20初版

墨署 佐々光典学士 南原繁

一九六二年二月

(付書評切抜) 野村浩一、植手通有

⑥政治理論史 1962・5・10初版 (財)東京大学出版会

墨署 佐々光典様 南原繁

(付書評切抜) 石上良平、有賀弘、大塚久雄

⑦南原繁対話民族と教育 1966・9・25初版

(財)東京大学出版会

墨署 佐々光典君恵存 南原繁

一九六七・三・一〇

(付書評切抜) 里見実、鶴飼信成

⑧歌集「形相」1968・6・10 (株)図書月版・出版事業部(復刊)

墨署 佐々光典学士恵存 南原繁

(付書評切抜) 前田透、朝日新聞「人」欄、同「点描」欄

⑨若い世代への証言 1968・7・10初版 (株)図書月版・出版事業部

部

墨署 佐々光典様恵存 南原繁

(付書評切抜) 無名

四 會津八一(宮川寅雄の師)と南原繁の接点

1 松本文庫蔵會津八一墨書贈呈本(南原繁宛)

昭和二六(一九五二)年五月一五日刊 中央公論社 普及

版「會津八一全歌集」

扉に墨書のみ

「南原繁博士吟正

會津八一」

2 新潟市會津八一記念館蔵(未発表) 南原繁書簡(會津八一

宛)

一九五二(昭和二七)年四月二三日 新潟市南濱通二番町 會

津八一宛 東京新宿区下落合二ノ七〇二 封書・ペン

拝啓 先日御地出向の節はわざわざ宿に御訪ねいたゞき且つ御歌集を頂戴いたし御芳志千萬有難く存じ上げま春 滞潟中は何彼と殆んど寸暇無之廿日の公開講演後御玄関ながら御挨拶に参上の心組で御座いましたが 予定よりも時間が延び四時半発の長岡行の汽車に漸く間に合ひ兼ねましたやうの次第にて遂に失礼いたしました多 先生には以前にたしか拙宅の近くに御住居の時代もあられたと記憶致しをり又今回は御同窓生青木俊三先輩より御近況等も承り益々御雅意のこと御およろこび申上げます 私も爾来俗事に追はれ作歌も中絶の形に相成り居りますが、御歌集は折にふれ拝読鑑賞致させて頂き度何卒この上とも御自愛專一に願はしく右不取敢書中御礼申し上げま春 勿々

四月廿二日

南原 繁

會津八一先生

御侍史

注

(一) 1、松本文庫蔵南原繁宛會津八一墨書贈呈本のことと思われる。

なお、本書簡の発表については所蔵の新潟市會津八一記念館のご好意と同館学芸員喜嶋奈津代氏の検索調査等のご助力があった

ことを特に記し謝意を表する。

3 津田事件における會津八一の関与

一九八九年九月二〇日 財団法人東京大学出版会刊

「聞き書 南原繁回顧録」より

(1) 第一審にあたって裁判長宛に提出した上申書(抜粋)

上申書

文学博士津田左右吉氏凶ラズモ其ノ学問的著作ニ関シテ法二問ハル。茲ニ等シク学界ニ席ヲ汚シ直接間接博士ノ人格ト学風ヲ識レル者等敢テ非礼ヲ顧ミズ一書ヲ捧呈シテ上司各位ノ御清鑿ヲ仰ガントス。(中略)

生等飽クマデ博士ノ無辜ヲ信ジ、何ヨリモ日本臣民トシ又学徒トシテ受ケタル最大ノ汚名ヨリ雪ガレ、殆ンド全生涯ヲ学問報國ノタメニ捧ゲ来リタル我が国ノ此ノ尊敬スベキ老学者ヲシテ其ノ終ヲ全ウセシメント念願スルノ余リ、敢テ所信ト衷情ヲ披瀝シテ上司各位ニ訴へ、謹シンデ公正明達ナル御審理ト御裁断トヲ冀フ次第ナリ。

昭和十七年 月 日

南原繁 和田清 安倍能成 出隆 池内宏 穂積重遠 高木八尺 我妻栄 田中耕太郎 宮沢俊義 原田慶吉 杉村章三郎 岡義武 石井良助 田中二郎 矢部貞治 横田喜三郎 丸山真

男 神川彦松 戸田貞三 原田淑人 辻善之助 伊藤吉之助
 尾島喜久雄 大西克礼 亀井高孝 小泉丹 狩野亨吉 幸田成
 行 松本芳夫 桑木巖翼 三淵忠彦 出石誠彦 福井康順 栗
 田直躬 相良克明 郭明昆 清水泰次 會津八一 白鳥清 杉
 森孝次郎 関与三郎 日高只一 煙山專太郎 松田治一郎 窪
 田通治 宮原民平 駒井和愛 寺尾元彦 岩崎努 河野與一
 立沢剛 秋山謙藏 西尾実 藤原咲平 西田幾太郎 朝永三十
 郎 田辺元 小島祐馬 原随園 梅原末治 落合太郎 天野貞
 祐 高橋穰 斎藤勇 辰野隆 谷川徹三 松本信廣 市河三喜
 太田正雄 間崎万里 長井真琴 山中謙二 今井登志喜 石原
 謙 三谷隆正 村岡典嗣 木村亀二 中川善之助 土居光知
 高柳真三 小宮豊隆 岡崎義恵 武内義雄 清宮四郎 柳瀬良
 幹 中村吉治 栗生武夫 高橋里美
 東京刑事地方裁判所第 部
 裁判長判事 中西要一殿

(2) 津田左右吉博士のこと

(前畧)

丸山 そのとき裁判所への無罪嘆願の上申書をつくられたのです
 か。あとで、私はその署名を集めに方々もつてまわりました。

南原 その文章がありますよ。岩波書店に残っていたんだね。

「これは先生の文章でしょう」といわれた。なるほど私の文章だ。

丸山 先生からこの人とこの人のところへ行けというふうに表示
 されました。私は東大だけ担当したのだけれど、最初が文学部
 の今井登志喜先生だったように覚えている。法学部でもはじめ
 から署名しそうな人のところには行かなかった……。何し
 ろ、早稲田大学当局の処置など実に冷たかった。いきなり休職
 にしたでしょう。われわれみんな憤慨しましたね、とうとう早
 稲田大学には署名をもらいにも行かなかった。

南原 災いが及ぶことをおそれたのですね。厄介なことをしでか
 してくれたというような気分が強かった。もちろん東大でおき
 た事件ですから、われわれがやるのは当然ですが、母校である
 早稲田がもう少しやってくれたらという気分はあったね。(後畧)

會津八一は、津田左右吉教授が同僚のことでもあり、さきに
 昭和九年五月、紀淑雄教授とともに、「會津八一氏学位論文審査
 要旨」をもって、八一に文学博士の学位受領資格を報告した津
 田への恩義もあって、大学当局の方針にもかかわらず、また時
 局に超然たる自己の態度にもかまわず、あえて署名したものと
 思われる。

また、その際津田を東大講座に招聘し、事件につながること
 となった南原繁の存在を知り、これがのちの歌人としての南原
 の登場以後大きな関心を寄せる伏線ともなったのではないか。

五 宮川寅雄と南原繁歌集「形相」

1 松本文庫蔵宮川寅雄「南原繁歌集讚」四首
封書（墨書）

昭59・11・21

消印 杉並南 1984・11・21 12—18

「1984 天気予報100年記念」60円切手

東京都中野区白鷺二丁目四—四 宮川寅雄

坂出市元町四—四—十二 松本昭雄様

手紙文の同封なし

本文（北京榮寶齋制赤色野線信箋一枚）

南原繁歌集讚

宮川寅雄

「エイドス」と己が歌集を名

ずけたる南原繁を肯^{うけが}にけり

徹底しても見るところに

思想生ずと歌詠み茂吉は

評しけるかも

南原繁の政治学など讀みたる

ことはなけれども遺せし歌はわ
が胸衝つも

人みなと隔たることなくみずか

らを位置づけ生きし人の歌

かも

2 松本文庫蔵宮川寅雄「南原繁の歌」二首

ハガキ（鉛筆・両面全面を白色の水彩絵具で丹念に塗りつぶ
してある）

十一月廿二日（推定 昭59）

消印 なし（未投函）

東京都中野区白鷺二丁目四—四 宮川寅雄

坂出市元町四—四—十二 松本昭雄様

手紙文なく二首のみ

南原繁の歌

「エイドス」と己が歌集を

名ずけたる南原繁

を肯^{うけが}にけり

徹底してもの見るところに

思想生ずと歌詠み

茂吉は評しけるかも

3 短歌新聞社刊（昭和六〇年二月二五日）歌集『風琴 宮

川寅雄歌集』（抜粋）

(1) 人々詠

「エイドス」と己が歌集を名づけたる

南原繁を肯いにけり

南原繁の政治学など読まざれど

遺せし歌はわが胸うつも

徹底してもの見るところに思想生ずと

歌詠み茂吉は評しけるかも

人みなと隔たることなくみずからを

位置づけ生きし人の歌かも

(2) 同あとがきより（抜粋）

あとがき

歌集を出すことにした。これはまちがひなく私の歌である。この二十年もの生活記事として、知遇をうけた方々に贈ろうと思いたったのである。（中畧）

この歌集を編んでいるとき、南原繁の歌集『形相』を手にしたが、歌のよしあしをこえて、南原繁の日本敗戦までの十年の歌は、私の胸にひびいた。私の歌集には『形相』のようなものは求めることはできないのを知っている。しかし私なりに、南原繁なみとまではいかなくとも、私の詩的生活はあつた。舌足らずの歌は、まごうかたなく私の歌である。たしかに歌を駆使するに、もう少し歳月をかけてほしいとは思うものの、私も東洋流で七十七歳である。それにこの先、もつとよく歌えるようになる保証はない。まずまず、どこにもある群小歌人並みのこの程度である。（中畧）

私には會津八一先生の在世中の歌はほとんどない。先生が逝かれてから作りはじめたのだが、本当を言えば、戦前にも少しは作り、先生に差出したことがある。歌には赤インキ^①で、評語が書かれており、大部分は落第だった。その紙片は、いまに遺っている。私はいくじがないから、先生が他界されるまで、歌は作らなかつ

た。といって私は先生の歌より、むしろ茂吉の歌風が身につけていたようである。茂吉の口真似を、ひどくしていた時期もある。もちろん、會津先生にも、茂吉にもあやかることなく、へたの歌ばかり、ともかくも三百首にちかく作ったものである。(中畧)

こうして私の晩年の一里標のように、この歌集は成立した。

(中畧)

こんな風を書いていくと、現代の歌についても言いたくないが、それは別の機会にしよう。ただ歌をつくって他人の歌の批評などする隙はない。この歌集は、ひたすらつましく、十七歳の挨拶ということにする。したがって、いろいろな局面をもった私の生涯のごく一部分を表現しているに止まる。それ以前は歌がないのだし、この二十年にしても、私にとって、大学の教師で生活した時期の、多少、退嬰的ともみえるくらしを反映しているのも止むを得ない。しかし火はまだ燃えのこっている。もしこれからの残年に、それが歌にも移るとしたら、少なくとも、第二歌集ができる筈であるのだが、おぼつかぬことである。

一九八四年十月十日記

宮川寅雄

注

(1) 後出六、1の「會津八一添削宮川寅雄歌集のことと思われるが、「赤インキで評語が書かれてある」とあるのは、朱筆のことであろう。

4 宮川寅雄日記(未発表)

(1) 一九八四(昭和五九)年七月二〇日

(全文)

終日時々雨降る。最高温度三十二度

ひるころ寺門先生のところへ齒を

入れる。春木やでワントン食う。「シル

クロード」(ヘデイン)下を買う。一緒に

南原繁の歌集「形相」(文庫本^①)

を買う。茂吉評はよい。よい歌あ

り。南原さんを見直すというより、さも

ありしと思う。マナその母と来る。遊

ぶ。「男と女はかなしいよ」なんという

歌をマナ歌う。午後六時ホテル

大倉で小西財団の会に出る。三上次男

、井上靖同席。会の名「新西域記研究

会」とする。十時帰宅。それより高山辰

雄論を考える。

注

(1) 同年七月一六日第一刷として発売されたばかりの岩波文庫版『歌集形相』のこと。

(2) 従って、同文庫版末尾収載の「こころふかく沈潜すれば歌はおのづから思想的となる」のこと。

(2) 一九八四(昭和五九)年七月二八日

(全文)

朝九時半反町鍼にゆく。寝不足

で一日中だるく、腰も痛い。

都丸でルドンの素描集(上記挿画にL.D.の注あり)(パリ版)と

みすずの「オデイン・ルドン」を買う

大雨ふる。連日猫騒動 妻神

経衰弱気味。黄①のこと札状印刷

にまわせしが封筒だけできてくる。

短歌新聞で及川、石黒二氏に会

いわが歌集を出すことにする。約

百万円(挿画三点入れる)夜、

歌稿をみる。三百首にするか三五〇

首にするか——。「あとかき」草稿書

く。夜慎治一家くる。モツアルトに食
事にゆく。木末をさそい夕食する。

注

(1) 中国の詩人黄瀛のこと。

(3) 一九八四(昭和五九)年七月二九日

(全文)

一日中、藁本「宮川寅雄歌集」

をいじりまわし修訂を施す。妻は

黄のことでの挨拶状御葉書を入れ

る封筒の宛名書きをする。

夜横浜帰りに木末食品買って

くる。ルドン素描集をみたれど

ルドンはさほど面白からず。ヘデイン

は大半終りに近し。唐津の四人に

札状を書く。天気ほゞよし。暑

い、三十二度となる。昨日「法隆寺

資料集」三冊とゞく前の四冊と

あわせて七冊出しこととなり約半分

を出版す。

5 宮川寅雄枕頭絶筆短歌一首

一九九〇年二月一日編集・発行 宮川ちとせ「宮川寅雄
俳句・短歌・詩」より

一九八四年二月二五日枕頭のメモ

わが歌はいよいよ散文のごとくなりて

いつか議論に沈むらんかも

6 針生一郎「宮川寅雄論序説」(抜粋)

宮川寅雄著作目録(昭和60年3月16日「和光大学人文学部

芸術学科「宮川寅雄著作目録」を刊行する会」編集発行)

中の「針生一郎・宮川寅雄論序説」より

(前畧)ひとつの専門領域に固執して、まとまったライフ・
ワークを残そう、といったケチな野心から宮川さんが解放されて
いた(中畧)その思想も文人氣風も宮川さんのばあい、半ば経歴
によって強いられたものだったことは、みのがすわけにはいかな
い。前半生の政治活動と会社員生活のあいだ、その旺盛な好奇心
と芸術的表現意欲は、あくまで個人的趣味として潜在するほかな

かったし、後半生の文筆家・学者への転身も、もちまえの感覚の
柔軟さで難なくきりぬけた(中畧)會津八一が弟子たちに要求し
た師をのりこえる道は、宮川さんにとって師の孤高純潔な求心力
にたいし、柔軟自在な感覚の遠心力以外になかったともみえる。

そういう意味で前半生と後半生の断層は、やはり宮川さんのう
ちに大きな刻印を残している。わたしは苛酷な体験の痕跡をとど
めない宮川さんが、自己の後半生をどこか「余生」と感じている
のではないか(中畧)戦前の非合法活動や戦中の特高監視下の時
代、宮川さんが敵味方をきびしく判別し、疑わしいものを警戒、
拒絶せねばならなかっただろうことを思えば、戦後という時代全
体がそうした極限状況を露出させない、長い「猶予」の時代だっ
たのかもしれない。

著作目録と自伝、そして最初の歌集の出版計画が、宮川さんに
生涯のしめくくりの自覚をかきたてたとすれば、こういう猶予の
期間が自己にとつても一般的にも終ろうとしていることを意識さ
せただろう。やりたいことがいっぱいあつて時間が足りないとい
う述懐は、人脈を離れて自己に沈潜しようという決意の表明とも
みえ、そういう段階で宮川さんを失ったのはかえすがえすも残念
だった。だが、そういう矛盾をはらみながらも、「最後の文人」
ともいうべき宮川さんの人柄と生涯は十分に魅力的で、密葬の遺

族挨拶で木末さん⁽¹⁾が語ったように、「一、ふかくこの生を愛すべし、一、かへりみて己を知るべし、一、学芸を以て性を養ふべし、一、日々新面目あるべし」という「秋艸堂学規⁽²⁾」を、このうえなぐみごとに実践したその生涯には、まだほりおこすべき多くの鉱脈がある。(後畧)

注

(1) 宮川寅雄令嬢。

(2) 會津八一が弟子に書き与えた四カ条。

六 師會津八一と宮川寅雄

1 會津八一添削宮川寅雄歌藁(未発表)

年不明(推定昭和十七年)十一月五日

(消印推定十一月六日)東京淀橋下落合三丁目一三三二

品川区大井倉田町三、二七三 宮川寅雄様

封書(別紙手紙文の同封なし・原稿用紙二枚の歌藁のみ)

皇龍寺址

いしづえの址と、のこれる群石^(むらいし)にあきひはもえてしづかなるかも

(朱)

○「皇龍寺址」の右に、(朱)よめず

○「」に、(朱)○、何とよむにや

○「群石^(むらいし)」に、(朱)横棒、語不熟

路上

市人が牛の車にうから、とのりてゆきかふ伽耶のふるみち

(朱)

○「歌上部」に、(朱)○

ゆくあきの空にましろきくもありて吐舎の山はひむがしにみゆ

(朱)

○「歌上部」に、(朱)○

○「みゆ」の右に、(朱)縦棒線、雲も亦た見ゆることあれ

ば山をのみ見ゆではいけない

南山の麓にて

遠つ世のひじりもこゝにあほりして敬礼釈然と教化せにけむ

(朱)

○「歌上部」に、(朱)○

全体として推敲不足なり

(前の原稿用紙二枚の「宮川寅雄歌藁」裏面の各面にわたって會津八一墨筆)

どんな下手な歌で

も自分で作れるといふ

ことはたいしたことなり

他人の作を読むのと

自作で詠むのとは

たいした差あり自分で

つくるときは大に

推敲し工夫して

よきものをつくるやうに

すべし

基調に於て他かが

乗りうつりてつき

ものがしてゐるといふ

やうなことでは

すべてが徒勞に

過ぎず生命なく

従つて価値なし

かせたりかぶれたり

することなく独自の

ものをつくるつもりで

かからねば一生かかりても

よきものは出来ざる

べし

2 會津八一書簡(宮川寅雄宛)

(1) 松本文庫蔵一九四三(昭和一八)年三月八日 宮川寅雄宛

はがき ペン (抜粹)

(前畧)

今回は酒などを飲みたがることをやめて、一同和歌をつくるべし。
日吉館にて酒を飲むのはよろしからずとおもふ。

(2) 一九四三(昭和一八)年二月二日(消印二月二一

日) 東京市淀橋区下落合三丁目一三二一番地より 札幌

市北一条グランドホテル 宮川寅雄宛 はがき ペン

(抜粹)

(前畧) 全体を通観せば敘事、抒情、写生、感動、象徴、滑稽

凡そ何でも僕の歌として攝取不捨なることを御理解あるべく候。
茫漠たる神韻もよろしけれどもいつも神韻ばかりでは困り候。即ち広汎に鍛練を要する所以にて候。

(3)一九四四(昭和一九)年二月一〇日 東京市淀橋区下落合

三丁目一三三二番地より 札幌市北一条グランドホテル

宮川寅雄宛 絵はがき(早稲田大学法学会会員写真) ペ

ン (抜粋)

登別温泉の歌四首(1)はよろしく候。斎藤茂吉調といふべく候。(中畧)自己批評といふことは常に大切に候。

注(1)この歌四首については、知られていない。

なお、宮川寅雄日記三日分ならびに會津八一添削宮川寅雄歌藁については、宮川木末氏の特別のご好意により発表させていただくものである。

七 歌集『形相』ならびに南原繁の短歌に対する評価の

推移の一端

1 図書月販『形相』復刊時(一九六八年、昭和四三年六月一

〇日)における報道、歌評等(佐々光典切抜保存資料による)

(1)同年九月一七日付「朝日新聞 点描欄」(全文)

南原繁氏の歌集

最近、復刊された南原繁氏の歌集「形相」が話題になっている。これは氏が昭和十一年から二十年までの動乱と戦争の時代に、折りにふれ、よんだ歌八百十九首を収めたもの。初版は二十三年に出た。

ただならぬ時代(とき)の流れのなかにして汝(な)がたましいを溺(おほ)れざらしめ

巻中の一首だが、復刊後、百二十通ばかりのたよりが読者から寄せられた。中には主婦や見知らぬ郵便局員からのもあり「先生が歌をおよみになるとは知りませんでした。真摯(し)な態度に打たれました」などと書いてある。

東大総長をやめて十七年。社会の表面に立つのをとかく避けがちに見える氏だが、「二世一代の歌集」として復刊に踏みきった。「最近も雑詠はなきにしもあらずですが、ああいう歌はもうできません」といつている。

(2)同年九月二八日付「朝日新聞」人欄(全文)

歌集「形相」を復刊した元東大総長

なんざらしげる
南原繁

「中森時人君から、あらたに出版事業を始める、その最初の仕事にしたい、といってきたので喜んで復刊することにしました」

昭和十一年から二十年までの十年間、太平洋戦争を中心に、時代は揺れ動いた。その間、日誌のかわりに書きつづけた短歌の中から選んだ歌集だ。アリストテレスの哲学にいう、永遠なるものの「形相」（けいそう）から題名をとった。二十三年に出版したが、その後、絶版になっていた。「いまも歌はつくります。しかし、あのあらしの時代に、緊張し、憂い、嘆いた、この一巻をもって、生涯の歌集とします」という。

「中森君」は二十六年、東大法学部緑会の委員長の時、単独講和に反対して学内で無届集会を開き、その責任を問われて無期停学の処分を受けた。その後、徳島県で十数年、高校教師をしたあと図書の日賦販売をはじめ、いまは全国に大きな販売組織をもつ会社の社長になっている。南原さんはそのときの東大総長だった。

二十六年暮れ、総長退任の送別会で学生を前にこう語った。「在職中、一番つらかったことは十数人の学生を処分したこと。その後、大半の学生は復学したが、なかに、そのままの人もある。諸君のうち連絡のとれる人は電話でいいから伝えてほしい。私の家の門はいつでも開いている」と

この春、かつて学生運動をしていた卒業生三十五人が集って、南原先生を囲む会を開いた。「学園では絶対に暴力はつづしまなければならぬ」と先生。「あのころは、みんな、自分たちのやることに責任をもっていましたね」という卒業生。話合いはなごやかに続いた。

七十九歳。毎朝五時に起き、東京・新宿区中落合の自宅のまわりを四十分散歩する。午前中は読書と執筆、午後は神田に出て学会の理事長の仕事を三時間つとめる。

(3)年月不詳、「毎日新聞（推定）最近の歌集から欄「現代人のいたみ（前田透）」（抜粋）

（前畧）小生（前田透のこと＝筆者注）の「煙樹」（八三七首）も、現代人のいたみを、都市や宗教や、大戦の回想、中国文大革命など、さまざまな素材の中でとらえようと試みた意味で、ここにつけ加えさせてもらいたい。

「短歌に何が出来るか」という問いが、零を予想するとしても、ひとつだけ出来るといえることがある。それは歴史の証言をすることだ。南原繁元東大総長の「形相（けいそう）」は、戦後出版され長く絶版となっていたものの復刊であるが、大戦前後から敗戦に至るまでの、時代に対する著者の憂悶（ゆうもん）の志が、歴史の証言となって表出されていることに、今さらながら重い意

味を感じさせられる。

(後畧)

2 最近の関連新聞記事から

(1)二〇〇六(平成一八)年二月二四日付「朝日新聞」市民と

非戦④欄 学徒出陣 教師の悔恨 「9条 最も現実的」

(早野透)より抜粋

―南原には、学問のかたわら詠んだ歌集「形相」がある。

人間の常識を超え学識を超えておこれり日本世界と戦ふ

(41年12月8日の真珠湾開戦の日)

君死にしときに思ほえずわが声出でて嘆きたるかな

(学徒出陣の教え子の戦死戦病死が相次ぐ)―

(2)二〇〇六(平成一八)年三月三日付「四国新聞」引田ひな

まつり記事より部分

―高松短大教授の藤原フサエさんがソプラノで、郷土の先輩・南

原繁氏の歌集をもとにした組曲を披露した。―

平井康三郎名歌曲集4 (株)音楽之友社 1997・7・20 第2
刷(平井康三郎著)より

歌曲集「春光」

南原繁作詞

Title Shunko (Spring Gleam)

Words by Shigeru Nambara

平井康三郎作曲

Composed by Kozaburo Y. Hirai

1 人はみな

Hito wa Mina (Man is Mortal)

2 きならぎ

Kisaragi (February)

3 月見草

Tsukimiso (Evening Primrose)

4 母恋し

Haha Kohshi (Longing for Mother)

5 春光

Shunko (Spring Gleam)

「歌詞、曲目解説」

1 歌曲集「春光」(しゅんこう)

南原繁作詞

(一)人はみな

人はみな死にゆくものかちちのみの

見まく欲りせししくなげ石楠花咲きぬ

八 歌集「形相」の短歌八首の作曲をめぐって

1 平井康三郎歌曲集「春光」

〔大意〕不老不死は古来人間の夢であつた。しかし生あるものは必ず滅するのが、自然の法則なのである。「亡き父君がこの上なく愛していたしやくなげの花が今年も美しく咲いた。それなのに父君はすでにこの世に在まらず」と作者は人間の悲哀をしみじみと嘆くのである。「死にゆくものか」のかは疑問ではなく、感嘆詞である。「父のみ」は「父上」と同じで敬称。「みま・くほりせし」はまくが敬語で、ほりせしは「欲した」の意で「さぞごらんになりたかつたであろう」ということである。

なお、「形相」(けいそう)は昭和四十三年^①に出版された歌集で世相のうつり変りを詠んだ歌が多いが、その中の「春光」にはこまやかな親子の情と美しい自然描写にすぐれた短歌が多い。

(一) きさらぎ

けふひとひこころ清かにありにけり

フリジアの花を買ひて来りぬ

二月のある日、町で買って来たフリジアの花を部屋に挿したら一日中清々しい気持であつた。

静かに明るく歌い出し、情感をこめて美しくうたいあげる。

(三) 月見草

宵闇を黄に咲く花のかなしけれ

吾が見てをれば二つ開きぬ

恋しみてわがかへり来しさ庭べに

月見草ひとつ咲きにけるかも

二首の歌は月見草に托して青春の哀歎をうたったロマンチックな歌である。高音から始まる前奏は宵闇にあでやかに咲く月見草の花を描く。第一首を静かに美しくうたい終ると、ピアノの感動にみちた間奏があり、第二首めはさらに盛り上つて感銘深く曲を終る。

(四) 母恋し

ははそはの母の形見の夏衣

わが着つつゆき母の恋しも

睡蓮の花の白きが咲きしつむ

池のみぎはに立ち嘆くかな

第一首は「亡き母の形見の浴衣を着てみると切に母上が恋しい」の意。「ははそはの」は母の枕詞。第二首は同じく睡蓮の

咲く池の水辺に立って亡き母を偲ぶ作者の嘆きである。

全曲を通して深い感情をこめて演奏しなければならぬ。

(五) 春光

音立てて霰^{あられ}ふり来ぬこの朝^{あした}

青き漬菜^{つけな}を食^はみつつをれば

わが待ちし春は来にけり天地^{あめつち}を

光に揺りて春は来にけり

— 歌集「形相」より

第一首は「朝の食卓に向って青い漬菜をたべていると俄かに大きな音を立てて霰が降って来た。」という意。

はげしい霰の音を現わす前奏に続いて緊張をもつて力強く歌ってゆく。そして「青き漬菜」からテンポをゆるめ静かに美しく歌う。その後間奏があつて第二首続く。

第二首は「待望の春のおとずれにも天も地も明るい春の光で一杯になり、喜びにふるえるばかりである」の意で、文字通りけんらんとはなやかに歌いあげ、力強い後奏に入つて終曲にふさわしく堂々と全曲を結ぶ。

南原氏は東京大学元総長。佐々木信綱氏の竹柏園に属する歌

人であつた。

この曲は一九六九年一月⁽⁵⁾ニューヨークで同氏の令嬢中込悦子さんのソプラノと平井丈二郎のピアノで初演された。

注

(1) 昭和二十三年(三月)の誤りか。昭和四十三年(六月)は、(株)図書月版・出版事業部刊の再版である。

(2) 歌集では「一日」である。

(3) 楽譜では「ははそば」(Happi soba)とあり、原歌と異つているのは歌唱上の都合であらうか。

(4) 南原は「形相」あとがきにおいて「暫く土屋文明氏の指導を忝うしたことがある。」と述べている。

(5) 米国在住の四女中込悦子宛の本歌詞の作曲・演奏進行の経緯を示す書簡をみると、一九六九年八月十三日付により日本において作曲完了。一九七〇年一月十九日付により、ニューヨークのハインツ家の音楽会成功と来月(二月のことか)は日本婦人会で平井令息と演奏云々とあり、ニューヨーク初演が一九六九年一月は思い違いで、一九七〇年一月もしくは二月が正しいと思われる。

平井康三郎名歌曲集4(株音楽之友社)の存在については、高松短期大学音楽科教授藤原フサエ氏のご教示があつた。

なお、昭和二八(一九五三)年一月、郷里三本松高校創立五十周年記念式典に出席のため、徳島県から県境の大坂峠を経て香川県入りした折、詠んだ歌「幼さなくてわれの越えにし大坂峠にたちて見放くるふるさとの町」が菊井松音により先に作曲されて

る。

2 南原繁書簡(米国在住四女中込悦子宛) 岩波書店刊「南

原繁書簡集」より

(1) 一九六六(昭和四二)年八月十五日

Nippon Electric N.Y. Inc. Pan Am Bldg. 3721, 200 Park Ave.
New York, N.Y. 10017, U.S.A.

中込悦子宛 封書(航空便)

ハワイから、ロスから、ニューヨークからと度々手紙ありがたう
皆にもみせた。悦子は中々筆まめで文章も達意で、その点母に
よく似てゐて頼母しい。(中畧)音楽の勉強のことは親子ともあ
まり無理なく、おのづからよい道が開かれんことを祈つてゐます。

(中畧)

八月十五日 悦子へ 父より

(2) 一九六七(昭和四二)年八月十二日

#1-P. 144-30, Sanford Ave., Flushing, N.Y., N.Y. 11355,

U.S.A.

中込悦子宛 封書(航空便)

(前畧)悦子も音楽の道が段々開かれ、何よりものこと。(後

畧)

八月十二日 悦子へ 父より

(3) 一九六九(昭和四四)年八月十三日

住所(2)に同じ

中込悦子宛 封書(航空便)

今日は悦子に嬉しい便りを書きます。数日前私の留守中突然平井
さんから電話があり、例の歌集から八首を選び既に作譜もされた
由。帰宅後電話して取り敢ず礼を述べると共に、十三日(今日)
車で途中お誘ひして学士会で昼食かたがたお話を承り度打合せ。
本日同家へ立寄りたる所、夫人、長男御夫妻も出て来られ、
早速作譜を歌って聞かせてくれました。曲は私にはよく分らぬけ
れども、いづれも花の歌で、快心の曲の様に見受けられました。
なほ完成してそちらも送るとか。学士会ではいろいろ会談、共通
の知人も多く、中々如才なき方との印象を受けました。御主人は
作曲、夫人はヴァイオリン、長男はチェロ、次男はピアノ等御一
家拳つての音楽専門家、何よりものことに思ひました。いづれ後
日適当な時に、当方としては御礼の印しにも色紙に一首認めて上
等の雲盤(額縁)に収めてお送りしては如何かと考へて居ります。
他によき案があればお報らせを請ふ。(後畧)

八月十三日 悦子へ 父より

(4) 一九六九(昭和四四)年九月二十三日

住所に(2)に同じ

中込悦子宛 封書(航空便)

今日は一つお報らせ。例の平井先生作曲の御礼にもと考へ、かねて約束してあった(昨二十二日)夜、御夫妻を車で落合に迎へ、富貴子の入念の料理で晚餐を共にした。相客として文化庁の次長安達健二君(東大卒の私の旧学生)を招く。文化庁は文部省の外局で音楽著作権協会(平井氏は同会理事の一人、予て安達君と相識)の主務官庁であり、いろいろ共通の話題もあるわけ。同君は近くワシントンで開かれる会議のため米国出張の筈。昨夕は晚餐の後、改めて作譜の贈呈を受け、テープを一同聴く。これに対して当方は花の歌一首を書いた色紙を雲版(三越最高の額縁^{額縁})に収めたのを御礼として進呈。なほおみやげとして平井・安達両家に果物一籠づ、贈呈。これで当方としては御礼を致したつもり。お含み置を請ふ。(後畧)

九月二十三日朝 悦子へ 父より

(5)一九六九(昭和四四)年十月十三日

住所(2)に同じ

中込悦子宛 封書(航空便)

拝啓 例の歌詞の英訳を同封します。私が訳したのを親しい米人に見て貰ったもの。少々意識したところがあります。例へば第七

首目の「青き漬菜」は pickled greens は滑稽。それで the first greens (初菜^{はつな})とした如きがそれ。

元来和歌は日本の言葉の芸術なる故、それを外国語に訳出することは不可能。唯、一首のうちに詩的なある「感じ」を汲み取って貰へば十分。なほ短歌の譜は一般的に単調なもの故、八首一度に歌っては聴衆は飽きるべく、三首か精々四首程度が如何か、と家族の間では話合つて居ます。或ひはそれを通常の新しい歌の合間に入れて歌ふのも一案かと想はれます。右御参考までに。全く素人の意見と御承知下さい。(後畧)

十月十三日 悦子へ 父より

(6)一九七〇(昭和四五)年一月十九日

住所(2)に同じ

中込悦子宛 封書(航空便)

新年のお手紙昨日到来。ハインツ家での音楽会の曲目など拝見。先づは成功の様子、祝着の至り。来月は日本婦人会で平井令息と演奏の後、いよくワシントン入りの由、ますく多くお喜び申します。(後畧)

一月十九日 悦子へ 父より